



TITLE:

# ポーレの恐慌理論

AUTHOR(S):

静田, 均

---

CITATION:

静田, 均. ポーレの恐慌理論. 経済論叢 1930, 30(4): 663-678

ISSUE DATE:

1930-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129870>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第

卷十三第

行發日一月四年五和昭

## 論叢

家屋税の課税標準

法學博士

神戸正雄

貨幣數量説について

文學博士

高田保馬

經營學と經濟學

經濟學博士

小島昌太郎

## 時論

配給組織の合理化と中央市場の單複制

經濟學士

谷口吉彦

## 說苑

統計學に於ける二つの傾向に就いて

經濟學士

蜷川虎三

ボーレの恐慌理論

經濟學士

靜田均

## 雜錄

英蘭銀行の職能

經濟學士

有井治

月賦信用の特質

經濟學士

今津正二

カッセの價值論廢止と價格問題の取扱

經濟學士

高森晋

相關係數の意義

經濟學士

益田熊雄

酒税の立替

經濟學博士

沙見三郎

近着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

# ポーレの恐慌理論

靜田均

資本主義經濟の發展は、ほゞ前世紀の七十年を境として、新たな歴史的段階に到達した。この十九世紀における最後の四半期を特徴づける著しい具體的事實の一つは、從來規則的に襲來した恐慌の激烈な發作に代つて、一見比較的より微弱な緩慢な經濟生活の起伏が續いた、といふことである。さうしてかやうな經濟的變化は、久しいあひだ恐慌の謎を解くべく科學的努力を強ひられて來た研究者たちに、一種の安易さをもつてその精神的重荷を放棄するの口實を提供した。企業の獨占的統制による恐慌の克服は、しばし人々の合言葉となつた。けれども歴史は、彼等の幸福な休憩を長くは許さなかつた。世紀の轉換に前後して高度資本主義諸國を震撼した經濟的不安は、彼等の關心を刺戟するに充分であつたからである。かくて人は、新たな熱意と緊張をもつて、事態の本質の闡明に、その徹底的解決に努力すべく召集された。吾々はこの期の產物として、第一に、ドイツ社會政策學會の克明な調査報告をあげることが出来る。<sup>1)</sup> さうしてそれは、信頼するに足る研究資料として確かに尊重に値ひする勞作に相違はないが、しかし本來の性質上、如何なる意味においても理論的な研究ではありえなかつた。かゝる時代的背景のもとにおいて、

1) Schriften des Vereins für Sozialpolitik. Bd. 105.

ポーレはシュパイトホフと共に、恐慌問題の理論的取扱ひに關し、ともかくも二十世紀のドイツにおける最初の聲高き發言者として著名である。

ポーレの恐慌學説は、少くとも今日より見れば、種々の困難を含むこと明らかなるがゆゑに、これを援用して現實における經濟生活の行詰りの解明に資することについては、もとより多くの期待をかけえないであらう。しかしそれは、問題の根本的な取扱ひ方において、あるひは救ひがたき個々の破綻においてさへ、いろ／＼の意味深き示唆を投げるものであつて、さすがにこの方面における忘れがたき歴史的文献たるを失はないのである。さうしていま私がこゝにその回顧を試みるのも、むしろ純粹な學說史的興味に主たる動機を負ふてゐることを告白しなければならぬ。この意味から、本稿はいはゞ一箇の閑文字以上に出でないかも知れない。

因みにポーレの見解は、當初、某學會における報告演説の速記としてその議事録のうちに收められて世に出たが、間もなく詳細なる補註を加へて單行本の形態で刊行された。『人口の變動、資本の形成および周期的經濟恐慌<sup>3)</sup>』が、即ちそれである。以下必要なる引用に際しては、讀者の便宜のために、可能なる限り右兩書の頁數を併記しておかう。

# 一

『國民經濟の病的狀態』である恐慌の本質を見究め、そしてその因果關係を正確に把握するためには、吾々はまづ、『國民經濟のノルマルな生理的な、恐慌から自由な狀態』を明らかにしな

2) Verhandlungen des 13. evangelisch-sozialen Kongresses. 1902

3) Pohle; Bevölkerungsbewegung, Kapitalbildung und periodische Wirtschaftskrisen. 1902.

ければならぬ。けだし生理學は、つねに病理學を理解するに必要な豫備知識を提供するものだからである。

ポーレが腦裡に描いた國民經濟のノルマルな生理的狀態とは、發展の過程にある國民經濟の動的な均衡狀態である。さうしてそれは、生産手段の年々の遞増的傾向によつて特徴づけられる。彼はこれに、資本財または生産手段の『相對的生產過剩』なる表現を與へてゐる。

彼自身の語るところによれば、『今日のあらゆる文明諸國は、規則的に増殖する人口をもつ』<sup>1)</sup>それと同時に、これらの國々の國民經濟は、年々新たに増加する人口が欲求するだけの消費資料を調達しなければならぬ。それには生産を擴張する必要がある。さうしてかやうな生産の擴張が圓滑に行はれ、國民所得も減少せず従つて平均的な生活程度も低下しないためには、年々新たに就業する人口部分に對應して、技術的に必要な生産手段があらかじめ配備されなければならぬことは、自明の理である。そこでポーレはいふ、『規則的に増大する人口を有する國民經濟が存在する限りは、資本財すなはち生産手段の不斷の相對的生產過剩の發生する必然性が存在する』<sup>2)</sup>。人口の増加と列んで、同じく近代の國民經濟において生産手段の相對的生產過剩を必然ならしめる第二の契機がある。それは技術の發展である。技術の發展はますます多くの勞働過程において、機械を人間に置き換へるところの、あるひは總じて間接の過去の勞働を直接の現在の勞働に置き換へるところの、努力となつて現はれる。『近代的國民經濟の資本集約度は、國民の總勞働を一方では生産手段の作出に他方では消費資料の作出に配分するにあつて、その比率を第一の生

1) Verhandlungen, S. 110. Bevölkerungsbewegung, S. 12  
2) Verhandlungen, S. 100. Bevölkerungsbewegung, S. 12

産部門に多からしめる<sup>3)</sup>。生産手段を作出する産業部門における従業者の数が、直接消費に供せられる生活資料を生産する産業部門のそれより遙かに急速に増加することは、すべての職業調査の示すところである。それゆゑ、資本財の相対的生産過剰は、技術の發展からも絶えず發生する。

『しかしながら、』とポーレは引續いていふ、『いま吾々の考察の目的にとつては、第二の場合を第一の場合に還元することが出来る。従つて吾々は、問題なるべく簡單にするために、以下において、資本財の不斷の相対的生産過剰の原因を、人口の増大のみに求めることにしようと思ふ<sup>4)</sup>』と。すなはち技術の發展は、多くの學者によつてしばしば力説されたところなるがゆゑに、ポーレはこれを繰り返すの煩をさけ、もつぱら人口の増加のみを強調せんとするものゝ如くである。

さてポーレによれば、『相對的に過剰に生産された資本財は、直接、所得によつて支拂はれるのではなくて、所得の留保部分たる貯蓄によつて支拂はれる。……貯蓄行爲こそは、まさに上述の意味において過剰に生産された資本財の支拂に必要な手段を提供するところのものである<sup>5)</sup>』。それゆゑ、『資本財の絶えざる相対的生産過剰の可能性は、所得の少なからぬ部分が所得者によつて彼れ自身の消費にあてられずに貯蓄されること、およびそれと同時に貯蓄されただけの額が新しい資本財に對する需要を展開するために費消されることにかゝつてゐる<sup>6)</sup>』、といふことが出来る。かくて國民經濟のノルマルな進行のために、二つの前提條件が必要とされることは、容易に察知しうるところである。第一は、年々貯蓄される貸附資本が、年々の人口増加に對應して

3) Verhandlungen, S. 101. Bevölkerungsbewegung, S. 12.  
 4) Verhandlungen, S. 101. Bevölkerungsbewegung, S. 13.  
 5) Verhandlungen, S. 102. Bevölkerungsbewegung, S. 14. 15  
 6) Verhandlungen, S. 103. Bevölkerungsbewegung, S. 15.

行はるべき總生産の擴張に充分であることであり、第二は、留保された貯蓄が年々實際に生産的に投下されることである。もしもこれら二つの條件が實現されぬ暁には、國民經濟は病的狀態に陥らざるをえないであらう。そこでポーレは次の如き重要な結論を引き出す、『これら二つの方面から、國民經濟的均衡の破綻が可能である。すなはち、年々の貯蓄の總額が資本財に對する國民經濟の總需要を充たすに足りるほど大でないか、あるひは財蓄そのものは充分でもその貯蓄額が時を同じうして生産的に支出されないか、いずれかの場合である』。『これら二つの場合の一つが到來すると、國民經濟の生理的な恐慌のない狀態が、病的な恐慌狀態に一變する。すなはち、まづ第一に、主として資本財を作出する生産部門が混亂に陥る』。資本財の生産領域における混亂は、やがて消費財の生産領域に波及し、部分的恐慌はつひに一般的恐慌に進展する。

## 二

吾々は前節においてポーレに追隨しつゝ、恐慌の發生すべき二つの可能的な泉源をつきとめた。それによれば、一つは當該國民經濟の貸附資本の形成が不十分な場合であり、他は貸附資本の形成そのものは充分だけれども、その資本財生産への轉化が時宜をえないで斷續的に行はれるため、久しきにわたつて兩者の間に量的合致が缺けてゐる場合であつた。これら二つの場合の具體的過程により立ち入つた説明を與へ、その原因機構を明らかにすることが、つまりポーレのみづから設定した課題なのである。従つて、その解決の試みである彼れの恐慌理論そのものもまた、

當然に二つの部分にわかれるわけである。すなはち第一の場合に關する説明に第二の場合に關する説明と。

吾々は、順序として、まづ前者の考察からはじめよう。

ポーレは次の如くに推論を進める、『年々充用さるべき貯蓄額の減少によつて恐慌が惹起されるといふ第一の場合は、今日の事情のもとにおいて主たる貯蓄者と見做される社會階級すなはち富裕階級の所得が減退するのと、同意義であらう。……富裕人口層の所得關係に變化なき限りは、年々の貯蓄額もまた何ら本質的な變化を示さないであらう。けれど、年々の貯蓄額の減少は、大資本家の減少といふことに歸着するであらうから。しかしこの階級の所得低減は、財産収益わけでも資本利得を犠牲とする勞賃の騰貴によつてのみ、惹起されるであらう。……國民所得に對する財産収益の割前を犠牲とする結果であり、従つて富裕階級の所得減を意味するところの、實質賃銀の騰貴は、やがて間もなく資本家階級により、彼等の貯蓄行為乃至は貯蓄の制限をもつて答へられるであらう<sup>1)</sup>』。

此の如きがポーレの説明の發端である。いふまでもなく、この場合における實質賃銀の騰貴は不景氣時の現象ではなくて、恐慌に先驅する好景氣時の現象に屬するが、しかし好景氣時における賃銀の騰貴は、果して資本利潤を侵食するであらうか。否、好景氣の際には、利潤は飛躍的に急速度をもつて騰貴し、勞賃騰貴の趨勢は到底それに及ぶべくもない。かくしてはじめて生産の全面的擴張が可能なのであり、現にこのことは、多くの學者の統計的研究の一致するところでも

1) Verhandlungen, S. 109-110. Bevölkerungsbewegung, S. 23-24.



ある。<sup>2)</sup> して見れば、利潤を犠牲とする勞賃の騰貴なる現象は、現實において如何なる景氣時期に起りうるかが、あらかじめ一應の吟味を値ひする問題であらう。ポーレの説明は、すでにその出發點において可なり現實ばなれのした假定に立脚する、といはなければならない。

さて、ポーレはさらに言葉を續ける。『かりに極端な場合を考へて、ある年における勞働者の所得が資本家の所得を犠牲として増加し、それがちやうど資本家が從來その所得をみづから消費せずに留保した量額に匹敵するとすれば、以下のやうな事態が到來するであらう。すなはち、資本家は爾後彼等の所得の一部を蓄積することをやめる。さうすると、新しい資本財の生産に充當されうべき貯蓄が全く存在しないのであるから、これまで附加的な資本財の製造に従事した勞働者は、いづれ解雇されるであらう。しかしながら、それだからといつて、一般的な經濟恐慌がすぐさま出現するわけではない。何となれば、資本財の生産が制限されねばならぬだけ、それだけ消費資料の生産が擴張されるからである。つまり勞働者は、彼等の増加せる所得を殆んど全部彼等の消費對象の調達に支出するであらう。かくて、まづ生産の方向における偏倚が発生するにすぎない。生産の實際の減少は、起らないであらう。<sup>3)</sup>』

後半の論理は、私にとつて必ずしも明瞭でないが、いづれにせよ、利潤を犠牲とする勞賃の騰貴だけでは恐慌の發生を必然たらしめる程度の貸附資本の形成の不足を立證しえないとポーレの考へてゐることは、明らかである。いまやポーレは、その推論の途次において、一つの難關に當面したかに見える。だが、それは彼れの力説する『人口の増加』によつて、切り抜けることが出來

2) Lederer; "Konjunktur und Krisen." (G. D. S. IV Ab. I. Tl.) S. 387 ff. Cassel; Theoretische Sozial-Ökonomik, 4. Aufl. S. 530 ff.

3) Verhandlungen, S. 111. Bevölkerungsbewegung, S. 24-25.

る。ポーレはたゞちに附け加へていふ、『しかし、つひには必ず一般的經濟恐慌が、いひかへれば人口の増加と生産の擴張との間の不均衡が、到來するであらう、いやしくも人口が絶えず増加する以上は』<sup>4)</sup>。こゝに持ち出された人口の増加は、リカアドウおよびラツサアルに見る如き、賃銀の騰貴の直接の産物ではない。言葉をかへていへば、賃銀の騰貴に伴ひ労働者の生活が改善されたため結婚數が増加した結果ではないのである。<sup>5)</sup>それは、賃銀の騰貴から全く獨立な、自然の傾向的事實である。それゆゑ、ポーレの見方は二元論的である、といへよう。すなはち、人口の増加に伴ひ、新たに出現する増加人口に生活資料を供給するには、生産の擴張を行はねばならぬがゆゑに、こゝにより多くの資本財を調達するの必要に迫られ、従つて貸附資本に對する需要を來す一方において、利潤を犠牲とする賃銀の騰貴の結果、貸附資本の供給が減退するとすれば、人口は増加するのに生産を擴張しえないこととなり、つひに經濟的均衡の破綻を惹き起す。さうしてそれは、消費すること餘りに多く、貯蓄すること餘りに少きことの結果なのであるから、消費不足ではなく却つて『消費過剰による恐慌として特性づけることが出来るであらう』<sup>6)</sup>。要するに、恐慌の直接の原因たる貸附資本の形成の不足を立證せんとするポーレの全企圖は、一方における勞賃の異常なる昂騰と他方における人口の増加とを支柱とするところの消費過剰説に、その歸趣を見出すものの如くである。

なるほど、利潤を犠牲とする賃銀の騰貴のみが長期にわたつて持續するならば、それは貸附資本の形成の不足を招來するかも知れぬ。けれども問題は、かくの如き異常なる勞賃の相對的騰貴

4) Verhandlungen, S. 111: Bevölkerungsbewegung, S. 25  
 5) Bevölkerungsbewegung, S. 73.-74. Anmerkungen 25.  
 6) Verhandlungen, S. 112: Bevölkerungsbewegung, S. 25

は、よしや一時的に發生しうるとしても、しかく久しきにわたつて永續しうるか否かである。いふまでもなく、かゝる消費過剰は、享樂財に對する相對的に過大なる購買力の存在を前提とするが、享樂財に對する相對的に過大なる需要が久しいあひだ存續する以上は、享樂財の價格は必然に騰貴するに相違ない。さうして享樂財の價格騰貴は、事實上、勞賃の騰貴を相殺するであらう。さらに、享樂財の價格騰貴は、生産手段の領域に刺戟を與へ、生産手段の價格騰貴を促さずにはゐないであらう。果してさうであるならば、消費過剰はこれら一聯の價格運動のうちに自動的な調整器を見出す、と考へなければならぬ。レエデラの適當に指摘してゐる如く、この點に關するポーレの誤謬の秘密の泉源は、實に彼が、『さうした情勢において當然に喚び起さるべき經濟的諸結果を、すなはち利子歩合の急騰、蓄積、附加的信用、およびわけても最終生産の價格騰貴等を全く看過してゐる』<sup>7)</sup>點に横たはつてゐる。彼れの推理は一面的に失し、畢竟、抽象的論理の遊戲に墮してゐる、といふのはかはない。それは餘りに全體的關聯を無視した見方である。

とにかくポーレは、經驗的事實の正視をさけることによつて、しばらくの間はしひまゝに饒舌を弄することが出來た。しかし、ひとたび振り返つて現實の事態との甚だしい相違に氣附いたとき、さすがに空虚感に耐え切れなかつたのであらう。『私は、現實の經濟生活における周期的恐慌が前述の如くにして發生すると思惟するものではない』<sup>8)</sup>と告白してゐる。それにも拘らず、彼が一方において、『恐慌の勃發が國民的生産物に對する勞働の相對的割前の増大によつて誘發されうるこの假定は、一見したところほど、しかし馬鹿げたことではない』<sup>9)</sup>と強辯するゆゑん

7) Lederer, a. a. O. S. 393. Fussnote.  
8) Verhandlungen, S. 112. Bevölkerungsbewegung. S. 26  
9) Verhandlungen, S. 110. Bevölkerungsbewegung. S. 24.

のものは、消費過剰による恐慌の發生が立證される以上、大衆の購買力の不足に恐慌の原因を求めるいはゆる消費不足説のよつて立つ地盤もまた同時に崩壊する、と信じたからにはかならぬ。

### 三

以上、これを要するに、消費過剰を樞軸として恐慌の襲來を説くポーレは、一方において彼れの歸結が經驗的事實から遊離してゐることを意識したにも拘らず、なほ理論的解決の試みとしてあるひは消費不足説の『最も適切なかつ最も的確な反駁』として、充分の意義を有しうるものと考えてゐるやうである。しかし、それが理論上においてすら成立の餘地に乏しいことは、吾々のわづかの分析によつても、ほゞ明らかになつたかと思ふ。吾々は次に、恐慌の發生すべき第二の場合に關する彼れの具體的説明を聽かう。さうしてそれは、『恐慌の眞實の原因』を取扱つた彼みづから宣言する部分であるだけに、吾々の興味と期待とは、ます／＼この部分に集中せざるをえない。以下景氣變動の全機構について彼れの語るところを簡単に摘記しよう。

まづ最初の問題は、好景氣は如何にして發生するか、といふことである。ポーレに従へば、好景氣を喚び起す『最も主要なる契機』<sup>1)</sup>としては、利子歩合の低いことが挙げられる。利子歩合の低率なことは、概して、自由なる貸附資本の豊富さを物語る證左であり、かつ産業資本家の經濟的活動を促す最も強力な誘因である。だが、そのほかになは次の如き諸契機が、すなはち收穫の豊凶、賃銀および物價狀態、信用關係、政局の推移等々も、考察の中に入らなければならぬ。

1) Verhandlungen, S. 112. Bevölkerungsbewegung, S. 26.  
2) Verhandlungen, S. 120. Bevölkerungsbewegung S. 35.



らず、新しい生産手段および勞働力に對する需要は不振を極める。その結果、利子歩合は低下し原料の價格や勞賃もまた低落する。かくて、經濟界の諸條件が産業資本家の活動に相對的により有利に展開されるに従つて、はじめの障礙が克服される。『あらゆる周期的恐慌は、それ自身のうちに恢復の手段を擔つてゐる』<sup>7)</sup>。

此の如きが景氣變動の總過程に關するポーレの分析の概要である。私は次に、あらためてその核心的部分を擴大し、若干の補足と吟味を加へよう。

ポーレによれば、周期的な一般的經濟恐慌の本質は、普通に考へられてゐるやうな單なる生産と消費との間の不均衡にあるのではない。『こゝに問題となれる不均衡は、より正確にいへば、自然的な人口増加と生産の擴張との間に存在する。さうであるからして、恐慌を論ずる場合、根本においては、生産過剰が問題なのではなくて、かへつて生産不足が問題なのである』<sup>8)</sup>。これを一言にして蔽へば、恐慌は、貸附資本が缺乏して、現實の生産が人口の増加に基づく欲求の増大に應じ切れないことの結果である。

ポーレの所論の前後を通じてまづ吾々の注意をひく點は、人口の増加と景氣の消長との連絡づけである。彼に従へば、人口の増加は、景氣變動の過程においておよそ三重の役割を演ずるが如くである。第一に、國民的總欲求の増大を齎し、従つて好景氣を喚び起す有機的原因の一つとなることによつて、第二に、恐慌の前夜においてさらでに減少の趨勢にある貸附資本に新たな需要を追加し、恐慌の到來を促進することによつて、<sup>7)</sup>「註二」第三に、恐慌が勃發して經濟社會が不

7) Verhandlungen, S. 117 Bevölkerungsbewegung, S. 32.  
8) Verhandlungen, S. 106 Bevölkerungsbewegung, S. 19.

景氣に轉換してからは、獨立の新たなる失業の源泉となり、かくて不景氣をいよ／＼深刻化することによつて。さうしてポーレは、爾餘の諸點における他の理論家たちとのあらゆる類似にも拘らず、この人口増加の觀點こそは、みづからの着想にいつるものとして、ひそかに自負してゐるかのやうである。『シユビイトホフにあつては』、と彼はいつてゐる、『(貸附)資本に對する需要の一原因たる近代國民經濟の資本集約度の増大のみをもつばら顧慮してゐるにすぎないが、これに反して私は、(貸附)資本に對する需要の他の原因をすなはち人口の増加に照應する生産の擴張を前景にすえた』<sup>9)</sup>と。

人口の増加が國民經濟の推進的要因であることについては、おそらく何人も異存をもたないであらう。けれどもそれは唯一の要因ではない。また最強の要因であるとも、にわかに斷定しがたいであらう。ポーレは一方において爾餘の諸要因をも念頭においたとはいへ、景氣の變動を説くに際し、ともすれば人口の増加を過重視した嫌ひはなかつたであらうか。それはしばらくおき、人口増加の意義を強調することがポーレの全所論を貫く最大の特徴であることは、確かである。多くの批評家が主としてこの點に論難の砲火を集中したのも、決して偶然ではない。なかんづく有名なのは、當時いちはやくワグナアによつて提起された疑問である。<sup>10)</sup>それは、例へばフランスの如き人口の増加なき國民經濟においてもなほ恐慌の發生する事實は、ポーレの理論によつて説明することが出來ぬ、といふにある。さうして同じ非難は爾來今日に至るまで多くの人々によつ

9) Bevölkerungsbewegung, S. 63. Anmerkungen 12.  
10) Verhandlungen. S. 133  
11) Spiethoff; Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohle (Schmollers Jahrbuch, Bd. 27. 1903. S. 707) Zimmermann; Das Krisenproblem in der neueren nationalökonomischen Theorie. S. 97.

て支持されてゐるがゆゑに、<sup>11)</sup>一見頗る有力な非難であるかに感ぜしめるかも知れぬ。しかし私の見るところでは、それは必ずしも彼に致命的な打撃を與へるほどの威力をもつものではないやうに思はれる。といふのは、今日における大多數の文明諸國は、程度のうへに差こそあれ、大體において人口増加の趨勢を示してをり、フランスの如く人口の停頓状態もしくは減少の傾向を示す國はむしろ異例の現象に屬する、と見ることが出来る。ポーレの理論が、この異例的な一國民經濟に單獨に起る恐慌の發生を説明するに不充分であることは、もちろんその妥當範圍乃至効果を部分的に制限するとしても、なほ一般的原理たることを排除しないであらう。のみならず、かりにフランスの内部から恐慌が発生しないとしても、他の諸國に發生した恐慌は、國際間の經濟的接觸が存在する限り、世界經濟の一環であるフランスにも波及せずにはゐないであらうから、かゝる外國の景氣變動に基因する恐慌の可能性も考へられるであらう。

さて、繰り返していふが、人口増加の意義を強調することは、ポーレの恐慌理論を貫く最大の特徴である。けれども、それだからといつて、彼れの立論の構成において人口の増加が恐慌の最大の原因とされてゐる、と即斷してはならない。事實はむしろそれと反對に、資本家的經濟の無統制に基づく貸附資本の干満が、景氣變動および恐慌の周期性の説明原理として最前面に現はれてゐるのを、吾々は見出す。人口の増加は、いはゞ、助演者としての役を振りあてられてゐるにすぎない。さうしてそれは當然でもある。なぜなら、人口の増加は國民經濟の重要な推進的要



因に違ひないが、しかし資本家的經濟は人口の自然的増加に順應してノルマルな發展をどげうると推測すべき充分の理由があるし、それに、いふところの人口増加は不斷の傾向であつて、何ら周期的な増減運動を意味しないものとすれば、(註二)それは、恐慌の周期的回歸および好景氣と不景氣との逐次的交替に關する説明原理として、到底耐えうべくもないからである。『近代國民經濟の周期的恐慌は』、とポーレは書いてゐる、『社會における年々の貯蓄の生産資本——機械、工場、船舶、溶鑛爐、鐵道、等々——への轉化が、均等のテンポで行はれないで、飛躍的または斷續的に行はれることのうちに、その根源をもつ。この重大な過程は、現在の經濟秩序においては、中央機關によつて統一的に指導され命令されることなく、總じて社會の代謝機能と同じやうにその遂行が個人的處理および多數の個々人の主觀的決意に依存するのである<sup>12)</sup>。あるひは、かうも書いてゐる、『周期的一般的恐慌は、資本の形成に際して區別さるべき二つの行爲、すなはち(一)所得の貯蓄または留保と(二)貯蓄された所得の生産的投資とが、しばしば時間的に甚だしくかけ離れてゐることによつて發生する<sup>13)</sup>』。

要するにポーレは、人口の増加ではなく、むしろ資本家的經濟の個人主義制に由來する貸附資本の干満によつて、恐慌の周期的到來に一應の説明を與へることが出來たのである。が、しかし實をいふと、かやうな説明の仕方は、毫もポーレに特有のものではなく、すでに彼以前において<sup>14)</sup>も、例へばシュツフレおよびビツガン・バラノヴスキイの恐慌理論において、その主要なる構成部分

12) Verhandlungen, S. 119 Bevölkerungsbewegung, S. 35

13) Verhandlungen, S. 113 Bevölkerungsbewegung, S. 27

14) Schäffle; Bau und Leben des sozialen Körpers. 1878 Tugan-Baranowsky; Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England. 1901.

を形づくつてゐるところである。すなはち末梢的な異同を別とすれば、この種の見解は、相當に古くから經濟學の領域における共有財産であつたのだ。この點に關するポーレの敘述は、何ら先人の所説に新たな寄與を加へるものではない。むしろ、その嚴密な理論づけは、シュビイトホフの研究によつて最高の發展形態に達した觀がある。年來學界の一隅に蟠居せるこれらの理論家たちを一括して總決算を與へることは、まさに吾々の避くべからざる義務ではある。しかしそれは、最も精緻なるシュビイトホフの理論をのものを批判の埒場に投ずることによつて、はじめて充分の成果をあげうるであらう。それゆゑ私は、敢えてこゝに立ち入つた論議を試みることを、この重大な義務の履行を、獨立の論文に託したいと思ふ。(註三)

〔註一〕 シュビイトホフはこの見解を難じて、人口の増加はつねに需要の増進を結果するがゆゑに、かへつて好景氣の瓦解を遷延せしめる傾向がある、と云つてゐる。Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohle. S. 707-708

〔註二〕 Bevölkerungsbewegung S. 73 Anmerkungen 25 の記述より類推してかく解す。なほ前註に引用せるシュビイトホフの論文を見よ。彼は人口の周期的増加について論じてゐる。

〔註三〕 由來、ポーレの恐慌理論は、種々の點において批評家の論難的となつてゐるが、ひとり絶大の讃辭を呈してゐるものに、オルデンベルヒがある。Oldenberg; Zur Theorie der volkswirtschaftlichen Krisen (Schmollers Jahrbuch, Bd. 27, 1903) 『レディウキツヒ・ポーレより正當に、目的の適つた問題の設定をなして新生面を拓いたものはない。私はポーレが生産過剩説を根本的に打ち破り、恐慌の根因を消費の側に求めながら、しかも俗間に流布せる消費不足説の誤謬に陥らざる點に、決定的な進歩を見る』。このオルデンベルヒの評價はもちろん誇大に失するが、ポーレの見解の特徴を指摘したものとしては當つてゐる、といへよう。(完)

5) Spiethoff; Der Kapitalmangel in seinem Verhältnis zur Güterwelt (Schmollers Jahrbuch, Bd. 42, 1918)